コロナ禍における学生同士の交流に関する取組事例集
【増補版】

独立行政法人
日本学生支援機構
JASSO Japan Student Services Organization

令和５年１月

はじめに

令和元年（2019年）末に始まった新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、大学等で学ぶ学生たちの生活に大きな影響を与えてきました。

特に、感染の拡大防止を目的として実施されるキャンパスの入構制限、授業のオンライン化、課外活動の制限、各種イベントの延期・中止等の措置により、学生間の交流や人間関係・ネットワークの構築が進みにくい状況が生まれ、こうしたことは、学生生活への適応や学生のメンタルヘルスにも大きな影響を与えていると考えられています。

このような問題意識のもと、各大学等では、コロナ禍による制約下にあっても、オンライン技術の活用やその他の創意工夫により、学生間の交流や学生の主体的な活動の場を確保することで、孤立・不安といった問題の解消のみならず、学生の自立・成長にも資する取組が数多く展開されてきました。

日本学生支援機構では、こうした取組の具体例について広く情報提供するため、令和3年度に実施した「大学等における学生支援の取組状況に関する調査」において回答いただいたコロナ禍に対応した学生支援の取組から、学生間の交流の促進に有益と考えられる取組を選定し、24校にご協力いただき、事例集をとりまとめ、令和４年８月に公表しました。また、その後寄せられた事例3校5件を追加し、このたび増補版として公表することになりました。

これらの取組のなかには、コロナ禍に対応して、新たな交流事業や支援制度を創設したものもあれば、コロナ禍以前から実施してきた取組を拡充したもの、実施方法を変更してコロナ禍の環境に適応させたものもあります。いずれの場合も、コロナ禍を契機として、学生同士の交流の重要性が改めて認識され、交流促進の様々な方法が模索・試行された結果であり、その成果は、コロナ禍が収束した後も、学生生活の充実や学生の成長に資する有効な方策として、多くの示唆を与えるものと考えられます。各大学等において、今後の学生間交流の促進の検討にあたり、本事例集を広くご活用いただければ幸いです。

最後に、ご多用の中、事例集の作成にご協力いただいた学校の皆様に、厚く御礼申し上げます。

令和５年１月

独立行政法人日本学生支援機構

理事長　吉 岡　知 哉

コロナ禍における学生同士の交流に関する取組事例集【増補版】

目　次

はじめに
１．コロナ禍における学生同士の交流に関する取組事例集の概要…… 1
２．取組事例　　*がついているものは増補版で追加された事例
様々な交流機会の創出
桜美林大学 「バーチャルキャンパス部室」……3
大阪大学大学院連合小児発達学研究科 「学生交流会」……4
名古屋大学 「クラス長会」……5
名古屋大学 「同郷の会」……6
北海道情報大学 「仲間づくりプロジェクト」……7
*武蔵野大学「SNS（Yammer）を通じたクラブ紹介」……9
明治大学 「和泉キャンパス周辺を散歩する会」……11
山梨県立大学 「県大ほっとカフェ」……12
龍谷大学 「百縁夕食」……14
ピア・サポートの活用
宇都宮大学 「学生支援ピアサポーター制度」……16
公立はこだて未来大学 「先輩サポーターによる個別支援」……17
東京大学 「オンラインでのピア・サポート活動」……19
広島大学 「オンラインでのピア・サポート」……21
文京学院大学 「先輩チャットラウンジ」……22
法政大学 「新入生サポート」……23
三重大学 「オンラインでのピア・サポート活動」……24
明治学院大学 「ピア・サポート団体「キャンパスコンシェルジュ」」……26
コロナ禍における留学生交流
茨城大学 「オンライン留学交流室と定期イベント」……27
香川大学 「インターナショナルランチ」……29
学習院大学 「中国人留学生会オンライン交流会、韓国人留学生会オンライン交流会」……30
成城大学 「パデュー大学日本語クラブとのオンライン交流」……31
帝京大学 「未入国留学生対象オンライン日本語ディスカッションクラスの実施」……33
*東海大学 「しゃべり BAR」……35
*東海大学 「Tokai Hygge」……36
東京国際大学 「オンラインでの留学生交流サポート／日本人学生と留学生の学生交流」……38
南山大学 「ランゲージバディによる交流サポート」……40
フェリス女学院大学 「ランゲージ・アシスタント（LA）・チューター／日本を知ろう／クロスカルチャー・カフェ」……42
流通経済大学 「留学生交流会（オンライン）」……44
*津山工業高等専門学校 「来日前留学生に対する事前ケア」……45
*津山工業高等専門学校 「中四国地区高専留学生オンラインイベント」……47

１．コロナ禍における学生同士の交流に関する取組事例集【増補版】の概要

本事例集は、日本学生支援機構が令和3年度に実施した「大学等における学生支援の取組状況に関する調査」で回答いただいた内容に基づき、コロナ禍において行われた、学生同士の交流を促進する取組24校25件を選定して令和4年8月に公表し、その後寄せられた事例3校5件を追加して、「増補版」としてとりまとめたものです。

コロナ禍の制約下においても学生間の交流や活動の場を確保する取組「様々な交流機会の創出」、学生が学生を支援する取組である「ピア・サポートの活用」、コロナ禍の入国制限により来日できない留学生との交流を中心として取り組まれた「コロナ禍における留学生交流」の3つの観点に区分して紹介しています。

（１）取組事例一覧　　*が付いているものは増補版にて追加した事例

○ 様々な交流機会の創出（学生間の交流や活動の場を確保する取組）

- 桜美林大学　「バーチャルキャンパス部室」
- 大阪大学大学院連合小児発達学研究科「学生交流会」
- 名古屋大学　「クラス長会／同郷の会」
- 北海道情報大学　「仲間づくりプロジェクト」
- 武蔵野大学　「SNS（Yammer）を通じたクラブ紹介」＊
- 明治大学　「和泉キャンパス周辺を散歩する会」
- 山梨県立大学　「県大ほっとカフェ」
- 龍谷大学　「百縁夕食」

○ ピア・サポートの活用（学生が行う相談・支援の取組）

- 宇都宮大学　「学生支援ピアサポーター制度」
- 公立はこだて未来大学　「先輩サポーターによる個別支援」
- 東京大学　「オンラインでのピア・サポート活動」
- 広島大学　「オンラインでのピア・サポート」
- 文京学院大学　「先輩チャットラウンジ」
- 法政大学　「新入生サポート」
- 三重大学　「オンラインでのピア・サポート活動」
- 明治学院大学　「ピア・サポート団体「キャンパスコンシェルジュ」」

○ コロナ禍における留学生交流（未入国学生を中心に交流機会を提供する取組）

- 茨城大学　「オンライン留学交流室と定期イベント」
- 香川大学　「インターナショナルランチ」
- 学習院大学　「中国人留学生会オンライン交流会、韓国人留学生会オンライン交流会」
- 成城大学　「パデュー大学日本語クラブとのオンライン交流」
- 帝京大学　「未入国留学生対象オンライン日本語ディスカッションクラスの実施」
- 東海大学　「しゃべり BAR ／Tokai Hygge」＊
- 東京国際大学　「オンラインでの留学生交流サポート／日本人学生と留学生の学生交流」
- 南山大学　「ランゲージバディによる交流サポート」
- フェリス女学院大学　「ランゲージ・アシスタント（LA）・チューター／日本を知ろう／クロスカルチャー・カフェ」
- 流通経済大学　「留学生交流会（オンライン）」
- 津山工業高等専門学校　「来日前留学生に対する事前ケア／中四国地区高専留学生オンラインイベント」＊

（２）調査時期

○ 令和４年５月～6 月

※「大学等における学生支援の取組状況に関する調査」（令和3年度）において、コロナ禍における学生間の交流を促進する取組について回答のあった学校のうち、令和3年度に取組実績があり、かつ事例集作成への協力を了承いただいた 24 校を対象に、詳細を調査しました。

○ 令和４年９月～令和４年12月

※事例について追加の情報提供をいただきました。

（３）留意事項

本事例集は、令和3年度における各学校の取組内容について記載したものです。そのため、取組内容が変更となっている場合がありますのでご了承ください。

２．取組事例

様々な交流機会の創出

バーチャルキャンパス部室

学生団体の活動を支えるために「バーチャル部室」を開設

桜美林大学（東京都・私立大学）

取組の目的・内容

新型コロナウイルス感染症による授業運営整備の延長で学生生活支援のオンライン化が検討され、学生団体の活動を止めない施策として用意した。また授業の合間などでも利用ができる交流の場として想定をしており、2020 年 6 月より開始した。

取組の特徴、工夫している点

Moodle を使用したバーチャルキャンパスというプラットフォームの中に設置をしており、オンライン部室は Zoom を利用したサービスである。

また全学生に対しインターネット環境の整備として、ノート PC、タブレット端末の無償貸与、学修環境整備充実奨学金（2万円）を支給した。

運営部署・参加学生数など

所管部署は学務部学生課が担当をしており、学生団体に所属をしている学生の総数である 1500 名が利用した。

取組の効果

当時緊急事態宣言で入構が制限される中、活動を止めない施策として各学生団体の利用があり、部会やミーティングで使用された。当初は授業の合間などでも交流の場として利用されることを想定していたが、LINE やそのほかのツールが利用されるようになり、交流の場としての利用につなげるには至らなかった。

今後の予定・課題等

現在では対面での活動が増えた影響で利用率が減っており、一部の団体を除きバーチャルキャンパス部室のサービスを終了している。しかしこれらの取組の継承として全学的なオンラインコミュニケーションツールの導入を進めており、学内専用 SNS の利用が 2023 年4月に控えている。

新型コロナウイルスと共生しつつコミュニティを創出していく形として、学内専用 SNS を導入することで、学生の社会性や人間性を育むツールとしての役割はもとより「コミュニティ形成」「地域創生」を実現できればと考えている。

またキャリア支援の分野をサポートするサービスの展開も視野に進めながら、コロナ禍で本サービスの稼働率を上げ、コロナ終息後もコミュニティ創出のきっかけとなるような学生生活の主軸を担うコミュニケーションインフラを目指している。

様々な交流機会の創出

学生交流会

新入生と在校生・教員の交流のきっかけづくり「Zoom ミーティング」

大阪大学大学院連合小児発達学研究科（大阪府・国立大学）

（大阪大学、金沢大学、浜松医科大学、千葉大学、福井大学の 5 大学連合の 3 年制後期博士課程大学院）

取組の目的・内容

2020 年 8 月に、新入生を対象とした修学相談会を実施した際、コロナ禍で学生同士はおろか指導教員とも交流がないという相談があり、教員・学生同士の交流を図ることを目的として 2020 年 8 月 12 日より新入生と在校生・教員との交流のきっかけとなるように実施している（Zoom 開催）。

2021 年度からは、授業終了後に授業の Zoom ミーティング ID をそのまま利用し学生同士の意見交換を行えるようルールを作成、現在は卒業生でもある教員が中心となり授業後の交流会なども積極的に行っている。

取組の特徴、工夫している点

学生交流会の初回は事務と教員が企画し、D1 学生と在校生との交流のきっかけを作るようにしている。

その後、学生同士での交流を行えるよう学生同士の交流会開催のためのルールを作成し、希望がある場合には協力できる体制を整えている。

また、研究科全体だけでなく各校ごとに交流会を実施してもらい、所属校での横のつながりも作りやすい環境を作れるようにしている。

運営部署・参加学生数など

主体部署 ： 連合小児発達学研究科教務担当教員 12 名、大阪大学事務 2 名

参加学生 ： D1（2022 年度は 16 名）、D2、D3 学生も対象（希望者のみ参加）

取組の効果

同級生で LINE グループを作ったり、各校の学生同士で勉強会を実施するなど、コロナ禍においてもオンラインを利用して同級生や上級生との交流も積極的に行われているように見受けられる。

今後の予定・課題等

2022 年度は 5 月 17 日に交流会を実施し、早い段階で学生同士の交流ができるように取り組んだ。

当研究科は 5 大学連合であるうえに社会人学生も多く、コロナ禍以前から全員が顔を合わせる状況になかったが、学生同士だけではなく教員とも顔合わせができるきっかけとなるものと考えており、今後も継続していく予定である。

様々な交流機会の創出

クラス長会

クラスの交流活性化のために「クラス長・副クラス長」が交流会

名古屋大学（愛知県・国立大学）

取組の目的・内容

春学期と秋学期の始めに実施している心の健康アンケートの結果から、コロナウイルス流行による大学生活や対人関係上の変化が、学生のメンタルヘルスに大きな影響を及ぼしていることがうかがわれた。

特に、学部1、2年生において、抑うつ・不安が高い傾向にあることから、大学内での居場所や友人関係の構築が必要と考えられた。

そこで 40 名前後のクラス単位による交流を活性化させることが重要であり、そのためにはクラスのまとめ役となっているクラス長・副クラス長への支援が重要だと考え、対面による「クラス長会」を 2021 年の 3 月、9 月の長期休業中に実施した。

取組の特徴、工夫している点

交流を促進するために対面での開催とした。ほぼ全員が初対面なのでグループワークを取り入れた。例えば、お互いの共通点を知ると心理的距離感が縮まることから、「共通点探し」ゲームなどを導入した。なお事前の参加者との打ち合わせ等は、より連絡をとりやすくするために SNS を活用した。

運営部署・参加学生数など

学生支援本部が主体となって実施した。

学部 1,2 年生のクラス長・副クラス長（クラスは1学年約 60 クラス）約 40～60 名が参加した。

取組の効果

クラス長会で実施したグループワークをヒントに、クラス長が自身のクラスにおいてクラス会を開催するに至ったり、クラス長同士が交流をすることでクラス長が安心してクラス運営に携わることができるようになった。

今後の予定・課題等

2022 年度も、長期休暇（9月と3月）にクラス長会を実施予定である。その際は、1年と2年のクラス長が交流できるような工夫をしたい。

様々な交流機会の創出

同郷の会

同郷の学生同士で交流、孤立を防ぐ

名古屋大学（愛知県・国立大学）

取組の目的・内容

本学は近隣からの進学者が約7割と多く、高校時代の交友関係を保持したキャンパスライフを過ごしている学生が多い。従って、遠方より入学した新入生にとっては、新しい交友関係を築くことが難しく、コロナ禍においてはその傾向が顕著である。

そこで、このように孤立した学生生活を余儀なくされている学部1年生を支援すべく、同じ出身地の学生と出会う場を設定し、交流する機会を作ることを目的として 2021 年 4 月及び 7 月に「同郷の会」を実施した。

取組の特徴、工夫している点

交流を促進するために対面での開催とした。開催時期は、授業1週目の週末と、試験期間開始前といった学生が適応に難しさを感じる時期に設定した。

当日は、同郷の学生同士約5名でグループを形成し、故郷にあって愛知県にないもの、愛知県にあって故郷にないものなどを抽出する課題に取り組むグループワークを取り入れた。

運営部署・参加学生数など

学生支援本部が主体となって実施した。

対象は学部1年生で、2021 年 4 月は 65 名、7 月は 26 名の学生が参加した。

取組の効果

開始前は緊張して静かな会場であったが、交流が進むにつれて学生たちは打ち解けていき、元気よく会話するようになった。またグループワークによって各グループの結束が強まり、終了後も席を立つことなく連絡先を交換したり会話を続けるなど笑顔がみられた。

今後の予定・課題等

2022 年度も、すでに第1回目の同郷の会を4月の授業1週目の週末に実施し、同様の効果が認められている。

様々な交流機会の創出

仲間づくりプロジェクト

新入生を対象に金曜5時限目にオンラインイベント開催

北海道情報大学 (北海道・私立大学)

取組の目的・内容

2021 年 4 月、入学後すぐに基本的に遠隔授業となった本学において、主に新入生を対象として、金曜日5時限目にオンライン上で学生同士の交流を目的とした、仲間づくりイベント(以下、仲間づくりプロジェクト)を計4回実施した。

Zoom を使用した部活・サークル紹介、Cluster(メタバース)を使用したバーチャル空間(バーチャル北海道情報大学)内でのアトラクションや、学生による学科紹介等を実施した。

メタバースを使用した学科紹介の様子

取組の特徴、工夫している点

Zoom やメタバースなど、学生に興味を持ってもらえそうな ICT ツールを活用したオンラインイベントとしたことが特徴である。さらに、Discord と呼ばれるコミュニケーションツールを用いて、イベント後も学生同士が連絡を取れるようにした。

運営部署・参加学生数など

仲間づくりプロジェクトは、バーチャル環境やゲーム性を取り入れた学習ツール等、新しい学習環境について研究し、教育に活用することを議論している FD ワーキンググループである「新世代の学生に対応する教育環境検討 WG(2021 年度終了)」(教員4名, 職員1名)が主体となって実施した。

また、学生サポートセンターや学習支援センター等、本学の学生の相談窓口となる事務局にも協力をしてもらっている。

司会進行などの登壇学生は、学習チュータや大学祭実行委員の学生、そして各部活・サークルの代表学生に声をかけて、担当していただいた。

司会担当は4名の学生が、部活・サークル紹介では 24 名の学生が登壇してくれた。

なお、本プロジェクトの会場となったバーチャル北海道情報大学は、上記の WG の教員の指導の元、基本的に一人の学生(当時2年生)が開発している。

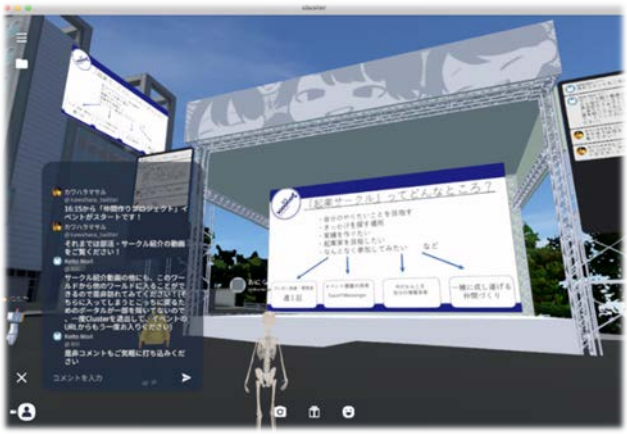
参加人数は、全 4 回実施して累計で 692 名が参加した。

取組の効果

参加学生からはオンラインのアンケート(有効回答数98件)において、「大変参考になった」が52%、「参考になった」が46%との回答があった。

また、「入学前に気になっていた同好会の説明が聞けてとても良かったです！」、「いっぱいサークルがあって面白かったです。」等、自由記述回答からもイベントが好評だったことが伺えた。

イベント後、文化系サークルについては、コロナ禍以前と同等の入部数があったと聞いている。



メタバースを使用したサークル紹介の様子

ただし、体育系サークルについては、オンラインの説明会だけでは、入部に至らなかったケースが多かったようである。

今後の予定・課題等

2022 年度は、対面での授業が再開に伴い、部活・サークル紹介も、コロナ禍以前のように対面で開催されたため、仲間づくりプロジェクトは実施しなかった。そのため、今後も開催する予定はない。

ただし、バーチャル北海道情報大学は、仲間づくりプロジェクト以外の学内イベント、蒼天祭(大学祭)やメディアデザイン展(学生作品の展示会)でも活用され続けている。

様々な交流機会の創出

SNS（Yammer）を通じたクラブ紹介

学内専用 SNS を使って学生間の絆をつなぐ

武蔵野大学（東京都・私立大学）

取組の実施経緯や目的

例年、対面で行っていた新入生向けのクラブ紹介イベントやビラ配りの実施が新型コロナウイルスの影響により、難しくなったため、SNS 上でクラブ団体と新入生が交流できる場として 2020 年 4 月より Yammer を活用した。

取組の実施期間

2020 年 4 月～現在まで継続して実施中

取組の内容

クラブ紹介をするコミュニティを Yammer 上に用意し、各クラブ団体のアカウントから新入生向けに各クラブのイベント情報や練習の様子を発信してもらう。新入生には入学式の際にログイン方法を記載した資料を配布し、コミュニティへの参加を促している。

取組の特徴、工夫している点

Yammer の特性上、大学アカウントでログインできるため、本学の学生だけのコミュニティを作ることができ、職員の目の届く範囲で安心して在学生と新入生が交流を行うことができる。各クラブからお知らせを発信する際にはクラブ名がわかるように、かつ情報も見やすいように工夫して発信するよう指導をしている。

運営部署・参加学生数など

- ○ 運営部署：学生支援課
- ○ 参加学生：学友会や大学祭実行委員、クラブ団体、新入生含む在学生（総勢 800 人程）

取組の効果

新入生を含む在学生、クラブ団体がコミュニティへ参加し、各クラブの情報が定期的に確認できるようになっている。各クラブのイベント情報が発信されることで、新入生がクラブ情報を収集し、加入につながるきっかけとなっている。

今後の予定・課題等

登録者を増やすために、Yammer の登録について学生に広められる機会を設けていければと思う。

～ Yammer とは？ ～

Microsoft 社が提供する企業向けのソーシャルネットワークで、”社内版 Twitter”や”企業向け Twitter”と呼ばれることもある。
個人向けソーシャルサービスと異なり、 Yammer は企業向けのセキュリティを実装しており、細やかなアクセス権設定など、ポリシーに沿った運用が可能。

様々な交流機会の創出

和泉キャンパス周辺を散歩する会

コロナ2年目の1･2年生のキャンパスライフ適応をサポート

明治大学（東京都・私立大学）

取組の目的・内容

実施日：2021年11月17日

経　緯：2021年度の秋学期から順次対面授業に移行し、新入生及びオンライン授業が中心であった2020年度入学の2年生にとっては、待望のリアルな学生生活の始まりとなった。
学生相談室では、2020年度から全キャンパスでオンライン行事を数多く実施していたが、対面授業の再開に伴い、久しぶりの対面行事の開催となった。
登校するキャンパスの周辺を散策し、土地柄や歴史を知ることで、大学への帰属意識を高めると同時に、教員や学生同士のコミュニケーションの場を設け、同じ時間を共有することで新たな学生生活に違和感なく馴染めることを目的とした。

内　容：学生相談室教員相談員と参加学生とで、和泉キャンパス周辺を散歩する。

取組の特徴、工夫している点

○ 教員相談員が、散歩コースにある自然や建造物などの説明を行った。
○ 感染対策のため、マスクを着用してもらい、体調の確認、検温を行った上で、参加してもらった。
○ 学年や学部がわかる名札シールを準備し、参加者全員に貼ってもらうことで、お互いに参加者の属性がわかるようにし、会話のきっかけの一つとして演出した。

運営部署・参加学生数など

主体部署：学生相談室（和泉キャンパス）
参加学生：9人（1年生5人、2年生4人）

取組の効果

少人数の設定だったこともあり、行事開始前の集合場所から、初めて会う学生同士のコミュニケーションが始まっていた。顔見知りの学生同士が、対面で初めて話すという場面もあった。

キャンパスに馴染むとともに、学部や学年を越えて直接交流する機会を作ることができた。

今後の予定・課題等

新しい環境に馴染む、リフレッシュする、コミュニケーションの場を作るなどを目的に、4月の新生活スタート時に同じ行事を実施する。また、季節の移り変わりを楽しめるよう時期を変えて複数回実施予定。

対象学生が学部1･2年生で、授業の空き時間が少ないため、授業に影響しない昼休みの短い時間での実施となっており、駆け足となってしまうことが課題である。

様々な交流機会の創出

県大ほっとカフェ

気軽な雑談・体験から、学生の意見を聞き、コミュニケーションを活性化

山梨県立大学（山梨県・公立大学）

取組の目的・内容

○ 開始時期

2021 年1月～、ほぼ週1回、1回 90 分程度。

○ 経　　緯

2020 年度、本学はコロナ禍により完全オンライン授業となった。同級生と共に体験できるイベントがほぼ皆無となり、大学に関するちょっとした情報を入手するのが困難な状況が生じていた。

学生からは様々な訴えが寄せられたが、感染拡大防止の観点から実現できないことも多く、この状況が長引くことで、大学の考えと学生の意見が乖離していくことを危惧していた。

こうしたことから、学生間のコミュニケーションを図ることが可能な場を増やし、学生の意見を聞く場を作る目的で本取組を開始した。

県大ほっとカフェのご案内

電子図書利用説明会

○ 活動内容

① 気軽な座談会

オンラインや対面で気軽に話す会

② 何かを体験する会

コラージュ制作体験、カードゲームなど対面で一緒に活動する会

③ 学生の声を契機に展開した活動の会

雑談の中から出てきた学生の声を基に『ほっとカフェ Presents』として、図書館と連携した電子図書説明会、学生自治会と連携したサークル紹介や学生への食料支援

取組の特徴、工夫している点

学生のスケジュールに合わせて開催を計画し、できるだけ学生が参加しやすい内容であることを重視している。“大学は学生のことを考えている”という姿勢が伝わるよう、チラシの掲示だけでなく、教員を通して広報活動をしている。

運営部署・参加学生数など

学務課と保健課の協同で運営している。
参加する学年や学科に目立った傾向はなく、参加人数は延べ 705 名である。
（うち食料支援を2回実施し、参加者は延べ 622 名である。）

取組の効果

参加学生からの感想として「学生のためにいろいろ考えてくれてありがとうございます。」といった言葉が寄せられた。実際の参加者は少ないが、少なくとも学生の心の拠り所になりつつあると感じている。

また、本取組の実施後、学生から「イベントを実施したい」などといった声が挙がるようになり、コロナ禍で消極的だった学生のモチベーションも少しずつ上がってきているのではないかと考えている。

今後の予定・課題等

感染状況次第だが、2022 年度も引き続き対面で実施する予定である。

今年度は、健康的な生活を支援するため、ヨガを実施しており、これからも学生のニーズに合わせた活動を行っていきたい。対面授業やサークル等の活動が再開されたが、これまでの2年間で十分な友だち作りができず、孤立している学生もいると思われる。

今後はそうした学生とも早期につながっていけるよう、教職員との連携を重視し、より有効な広報のあり方や参加しやすい開催方法の工夫を重ねていきたい。

様々な交流機会の創出

百縁夕食

「食の支援」から広がる相談・活動・交流の場

龍谷大学（京都府・私立大学）

取組の目的・内容

（1）取組の開始時期

2021 年第 1 学期（6 月～7 月）、第 2 学期（12 月～2022 年 1 月）

（2）開催経緯・目的

2021 年 5 月に 学生の実態及び学生が必要としている支援内容を把握するため、学生アンケートを実施。

アンケート結果から、ひとり暮らしの学生が食費を削っている状況や、多くの学生がサークルに所属する機会を逸している状況が顕著であったことから、100 円で夕食を提供する「百縁夕食」を実施するとともに、サークル紹介や発表の機会の場を設けるなどの対応を図った。

百縁夕食

第 1 学期に好評であった「百縁夕食」を第 2 学期には、「保護者による学生応援企画」として、対象を一人暮らしの学生から、コロナ禍で頑張る全学生に拡大し、保護者会主催で実施。

（3）内 容

① 龍大生協等と連携し、学生負担 1 食 100 円で栄養バランスの取れた夕食を日替わりで提供

② 学生交流機会創出を目的に、「百縁夕食」の提供会場で、先輩学生による「授業なんでも相談会」、「サークルなんでも相談会」を実施

授業なんでも相談
先輩学生たちが、レポートの書き方や試験・成績に関する相談を実施

サークルなんでも相談
先輩学生たちが、入部可能なサークルなどを紹介

③ コロナ禍の活動制限により、低迷している学生諸活動の発信、交流機会の創出を図るべく、「百縁夕食」提供会場でミニライブや活動紹介展示などを実施

マンドリンオーケストラによる
ミニライブ

ボランティア・NPO 活動センターによる
活動紹介展示

書道部による作品紹介展示

取組の特徴、工夫している点

「百縁夕食」提供後に、先輩学生との相談ブースを設けることで、交流機会の創出を図った。

また、同会場でミニライブや作品展示を行うことで、コロナ禍で低迷している課外活動の成果発表の機会を確保した。

新入部員募集中のサークルに出展してもらうことで、活動意欲のある学生とのマッチングに繋がった。

運営部署・参加学生数など

①「百縁夕食」
　担当：総務課
②「学生交流イベント」
　担当：学生部、教学企画部・障がい学生支援室、協力学生：約 30 名
③「課外活動成果発表」
　担当：学生部、ボランティア・NPO活動センター事務部、協力サークル 4 団体・63 名

取組の効果

参加した学生からは、コロナ禍でアルバイトが制限されている中、食支援の取組があって良かった、「オンライン授業が中心で、自宅で一人だったので食堂で先輩学生たちと交流ができて良かった」といった声が寄せられた。

百縁夕食は、第 1 学期：11,383 名、第 2 学期：14,179 名が利用し、同日開催の学生交流イベントにも多くの学生が参加し、交流を図っており、効果があったと考えている。

今後の予定・課題等

2022 年度は 7 月に実施し、今後については、検討中である。

ピア・サポートの活用

学生支援ピアサポーター制度

新入生の悩みに在校生がオンラインでアドバイス

宇都宮大学（栃木県・国立大学）

取組の目的・内容

新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、課外活動の停止やキャンパスへの立入制限等、種種の制限を行っていたため、新入生が安心した大学生活を送れるよう、在学生が学生支援ピアサポーターとなり、学部１年生（編入生含む）の学生生活上の相談や悩みごとについて、オンラインで自身の経験等に基づいたアドバイスを行い、適切な相談窓口等の情報を提供することを目的として、令和２年６月下旬から全学的に実施した。

取組の特徴、工夫している点

ピアサポーターに選出された学生には研修受講を必須とし、各学部の実情に合わせ、Zoom や LINE、C-Learning（学習管理システム）などを使いサポートを行った。

また、令和３年度からはピアサポートリーダーを配置し、サポーターへのアドバイスを行う体制を整えた。

運営部署・参加学生数など

運営部署 ： 学務部学生支援課及び各学部

ピアサポーター学生（令和３年度） ： ２年生121人、3年生138人、４年生58人
大学院１年生33人、大学院２年生12人

取組の効果

いつでも気軽に相談して欲しいと呼びかけていたため、新入生が学生生活を送る上で安心感を与えることができた。

また、本事業は令和２年度から実施しているが、支援を受けていた学生が、進級して支援する側にまわったケースもあり、ピアサポーターの養成にも繋がっている。

今後の予定・課題等

令和４年以降は、ピアサポーター養成という目的に、より軸足を移し、学生による学生のための相談窓口（ピアサポートデスク）を学内に開設して、仲間（ピア）同士が気軽に楽しめる環境づくりを行うとともに、研修等によりピアサポーターへの支援を行う予定である。さらに、ピアサポーター経験者には、実施証明書を発行することとした。

ピア・サポートの活用

先輩サポーターによる個別支援

図書館の自習スペースで「先輩サポーター」が学習支援

公立はこだて未来大学（北海道・公立大学）

取組の目的・内容

コロナ禍におけるオンライン授業中心の環境では、学生同士のつながりが希薄となるため、学生同士の互恵的な関係を築くことが難しい。

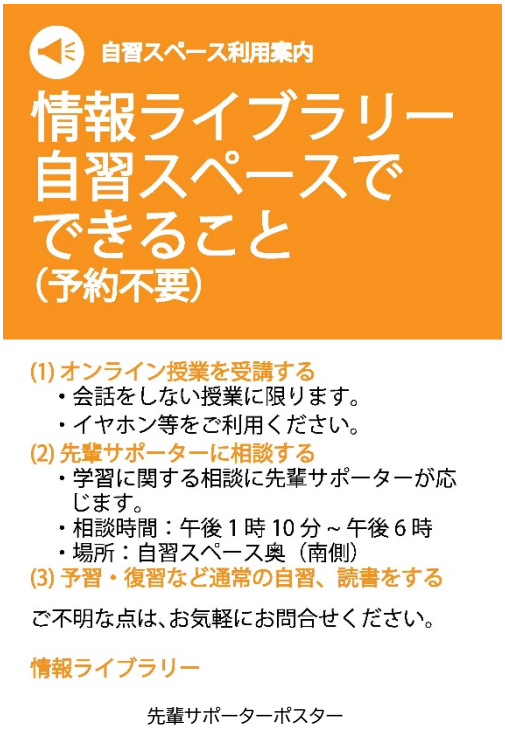
その結果、生活面や学習面で困ったことがあっても誰にも相談できないまま学業不振に陥ることがある。そこで、大学生活・学習でのちょっとした疑問やつまずきをすぐに気軽に相談できる場として、情報ライブラリー（図書館）内に自習スペースを設置した。

自習スペースでは、先輩サポーターが対面のマンツーマンによる学習支援を行った。

情報ライブラリー内の自習スペース

活動期間は 2021 年 4 月～2022 年 1 月。平日 3～5 限、先輩サポーター2 名が自習スペースに常駐した。

取組の特徴、工夫している点



先輩サポーターポスター

まず先輩サポーターの存在を知ってもらうために、ポスターを作成し、学内に掲示した。また、先輩サポーターが学内のフリースペースで学習中の学生にチラシを配布した。その際、積極的に話しかけたことが、自習スペースを利用するきっかけになった。

学習支援の内容は、担当の先輩サポーターが Google スプレッドシートの業務記録表に入力した。教員が入力内容を確認し、学習支援の方法や注意点などを適宜コメントした。定例ミーティングを週 1 回行い、業務記録表をもとに支援内容の共有・検討等を行った。

運営部署・参加学生数など

運営部署は、メタ学習センター（CML）、情報ライブラリー、教務課。
先輩サポーターは 15 人（学部の 2 年生 5 人、3 年生 3 人、4 年生 5 人、修士 1 年生 2 人）。
応募者 30 人の中から対応可能科目数および志望理由をもとに採用した。
採用された先輩サポーターは、「後輩を助けたい」ということを志望理由に挙げていた。
例えば、「去年からオンラインでの授業や活動が多く、人と関わる機会があまりなかったとき、つらく感じてしまうことがあったので、少しでもそのような人の助けになれればと思います。」「僕が1、2年の時、気軽に勉強の相談ができる人がいれば良いのにと思ったことがあった。今、同じように悩む学生がいるのであれば、助けになりたい。」 など。

取組の効果

相談件数は 252 件。プログラミング科目（146 件）が最も多く、次に数学科目（55 件）が多かった。
利用者アンケートでは、
「聞かなければ解決できなかったので利用してよかったです」
「とても、わかりやすくアドバイスしてもらえた。自分が聞いたところ以外で直したほうがよいところや改善できるところも教えてもらえて、とても嬉しかったし助かった」
「なるべく僕自身の力で、問題を解けるようにアドバイスしてくださった」
等の肯定的なコメントがあり、否定的なコメントはなかった。

今後の予定・課題等

2022 年度から対面授業中心となったため、先輩サポーターによる個別支援は中止となった。2022 年度からは、学習支援センター「メタ学習ラボ」が先輩サポーターに代わり、対面による学習支援を行っている。

先輩サポーターでは、授業関連の相談だけではなく、2 年次以降のコース選択や卒業研究のための研究室配属に関する相談も多かったことから、今後は進路選択に関するワークショップ等も検討していきたい。

ピア・サポートの活用

オンラインでのピア・サポート活動

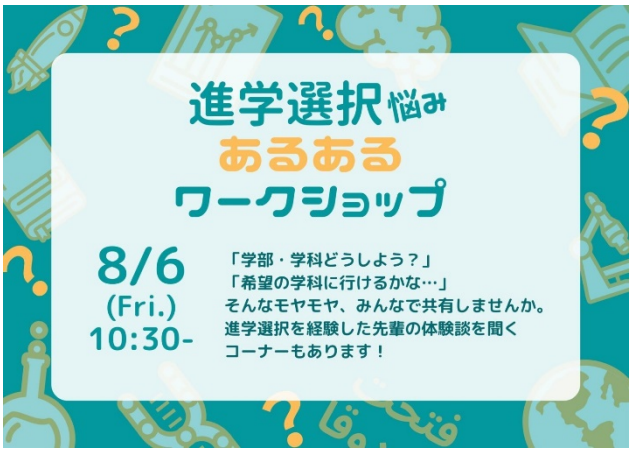
安全で安心して参加できるオンライン交流

東京大学（東京都・国立大学）

取組の目的・内容

東京大学では、相互扶助精神をもったピアサポーターがキャンパスに出ていって、学生ならではのアイデアと問題意識にもとづくアウトリーチ型の支援活動を行うことで、キャンパス全体に学生同士の支え合いの風土が根付いていくことを目指している。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて、キャンパスにおける活動が制限されたことに伴い、2020 年度からピア・サポート活動も対面からオンラインでの活動に移行せざるを得なくなった。セキュリティ的にも、心理的にも、安心して参加できるよう、オンラインでの活動のポリシーを定め、さまざまな交流イベントや啓発活動を行っている。



ワークショップのポスター

オンラインイベントのポスター

《2021 年度の主な活動》

○ 交流イベントの実施

自由に交流できる談話室や就職活動・進路選択・読書等のテーマ別のオンラインでの交流イベントを、計 64 回実施、のべ 225 名が参加。

○ 情報発信・啓発

メールマガジンを 8 回発行、相談機関の紹介記事のウェブ発信、コロナ禍のストレスアンケートの実施（526 名から回答）と公表等を実施。

取組の特徴、工夫している点

オンラインでの交流を参加者の学生にとって、安全で安心できる場にするために、オンラインイベントに関する参加ポリシーを定め、参加申込時にそのポリシーへの同意を求めるようにした。具体的には、「ウェブ会議のアクセス情報を他者に知らせないこと」、「迷惑行為や誹謗中傷は行わないこと」、「録音・録画を行わないこと」、「ポリシーに従わない場合には退出等の対応を取ること」、「互いに相手を尊重しプライバシーに配慮すること」等のポリシーを定めている。

また、参加学生同士の交流を促進するために、ピアサポーターを対象に、話の聴き方やファシリテーションについての研修を実施し、スムーズに交流できるように配慮するよう指導している。

オンライン中心の学生生活が続く中で、キャンパス内でのポスター掲示による広報が難しくなっていたため、SNS やウェブサイトを用いた広報にも注力した。

ウェブサイト：https://ut-psr.net
Twitter：https://twitter.com/utpsr
Instagram：https://www.instagram.com/ut_psr/
LINE：https://page.line.me/joz2558e

運営部署・参加学生数など

東京大学では、相談支援研究開発センターにピアサポートルームを設置し、有償の学生ボランティアとして、支援についての知識とスキルを身につけたピアサポーターを養成し、その組織運営を支援し、学生が学生を支えるピア・サポート活動を全学的に展開している。
2021 年度には、認定研修を受講した 60 名が新たにピアサポーターとして認定された。
2021 年度末時点での在籍サポーター数は 166 名となっている。

取組の効果

オンライン中心の学生生活になり、学生同士の交流の機会が少なくなっている中で、安心して交流できる場を提供することができ、多くの参加者からポジティブな反応が得られた。

～ 参加後アンケートからの感想（一部） ～
「色んな人と交流できて楽しかった」
「落ち着いた雰囲気で、話したいことを話すことができた」
「悩みを共有できた」
「有益な情報を得ることができた」
「色々な意見が聞けて新鮮だった」
「時間の流れがすごく緩やかで、聞いていて心地よかった」

今後の予定・課題等

2022 年度からは、対面でのピア・サポート活動も再開している。授業や課外活動も対面での活動が徐々に再開し、キャンパスに学生が戻ってきている中で、対面での活動とオンラインでの活動とをどのように併用していくかについては、今後の検討課題となっている。支援活動を全て対面に戻すということではなく、対面とオンラインのそれぞれに長所・短所があり、両者をうまく使い分けていくことが必要だと考えている。
また、対面で活動していた頃のことを知るピアサポーターの多くが卒業・修了しており、対面活動のノウハウやマインドをどのように継承していくかも課題になっている。

ピア・サポートの活用

オンラインでのピア・サポート

新入生や大学院生を対象としたオンライン相談･交流

広島大学（広島県・国立大学）

取組の目的・内容

新生活への不安解消のお手伝いとして、ピアサポートルームでは、入学前の学生を対象とした入学前オンライン相談、入学後の学生を対象としたオンライン新入生相談を実施してきた。入学後にもさまざまな不安を抱えることがあるため、オンライン形式で随時相談を受け付けてきた。さらに、夏休みにも再度オンラインで相談を受け付け、大学生が抱えている不安に対応してきた。

また、大学院生は各自が所属する研究室での活動が主となり、他の研究科と交流する機会が少ないのが現状である。そこで、ピアサポートルームでは、4月と10月に大学院生を対象としたオンラインによる交流の場を提供してきた。

取組の特徴、工夫している点

新入大学生は、入学前後や夏休み明けに不安を抱えることがある。そこで、今回の取組では、大学生が不安を抱えやすい時期に合わせて、アクセスしやすいオンライン相談を実施した。

また、各相談会、オンライン大学院生交流会の開催にあたって、学生サポーターが安心して相談を受け付けることができるように、傾聴の研修を実施した。

運営部署・参加学生数など

ピアサポートルームは、教育室に置かれた業務センターの１つであり、学生総合支援センターが統括している。ピアサポートルームに関する事務は、学生生活支援グループが行っており、ピアサポートルームの活動に参加している学生は、学部１年から大学院修士２年までの約 40 名。

取組の効果

入学前後のオンライン相談では、新生活への不安について対応することができた。また、オンライン大学院生交流会では、各研究科の垣根を越えて実施したことで、普段会うことができない大学院生と交流でき、さまざまな情報を共有することができたと報告を受けた。

今後の予定・課題等

2022 年度以降についても、学生による学生のための新入生なんでも相談と大学院生交流会は、今後も継続して実施していく。コロナウイルス感染流行の状況に応じて、対面での実施、もしくは対面とオンラインでのハイブリット開催など工夫して実施していく予定である。

ピア・サポートの活用

先輩チャットラウンジ

1 年生の悩みを解決するオンライン相談

文京学院大学 （東京都・私立大学）

取組の目的・内容

2020 年 9 月コロナ禍でオンラインでの授業が続く中、「1 年生の力になれることはないだろうか」というところからスタート。先輩たちが、1 年生対象に部活・授業・友達づくりなど学校生活における悩みについて、MicrosoftTeams を通じて直接オンラインで相談できる機会を設けた。

なお、先輩チャットラウンジは、事前申込制となっており、MicrosoftForms で相談したい先輩を選択して申し込みを行い、当日 Teams を利用してオンラインで相談という流れとなっている。

以後 2022 年まで定期的に実施している。

取組の特徴、工夫している点

1 年生が相談しやすい環境づくりとして事前に相談にのる先輩スタッフのプロフィールを先輩チャットラウンジ Teams 上に公開した。

緊急事態宣言下は全面オンラインで実施。解除後は対面とオンラインを並行して実施した。

運営部署・参加学生数など

学内の委員会・自治組織のリーダー学生から組織される SLF（スチューデント・リーダーズ・フォーラム）委員会が主催。

SLF には、2021 年度は 13 名が在籍しており、そのうち 2021 年 12 月は、9 名、2022 年 4 月は 9 名が相談員として対応した（SLF 委員だけでなく他の委員にも協力を依頼）。

チャットラウンジは、2021 年 12 月は 2 名の参加にとどまったが、2022 年 4 月は 56 名が利用した。

取組の効果

学生生活に不安を抱えている学生の悩みの軽減につながるとともに、先輩後輩という縦のつながりが構築できた。

今後の予定・課題等

2022 年度も継続して実施を予定。学内のメールシステムや Office365 を使用しての告知やポスター掲示での告知を行っているが、より多くの学生に参加してもらえるよう工夫が必要。

今後オンラインの仮想空間を使用しての実施を検討している。

ピア・サポートの活用

新入生サポート

コロナ禍以前からのサポートをオンラインで継続

法政大学（東京都・私立大学）

取組の目的・内容

コロナ禍以前から毎年 4 月に実施している「新入生サポート」を 2020 年度はオンラインで実施、2021 年度は対面・オンラインで実施した。本取組は、入学直後で不安を抱えている新入生に対して、先輩学生（新入生サポーター）が学生生活や履修等に関する相談に乗り、大学生活を円滑にスタートできるようサポートを行うことを目的として実施している。

取組の特徴、工夫している点

対面実施の場合、相談ブースを多くの学生が通る学部事務室前のスペースに設置することで、事務室に相談に行く前に疑問を解消することができ、新年度の学部事務室窓口混雑緩和にも効果的であった。

また、オンライン実施の場合は、新入生には顔出しや氏名表示を強制しないことで、気軽に参加しやすいよう工夫を行った。新入生サポーターに対しては事前研修をし、新入生と接するうえでの心構えや注意事項を伝えることで、スムーズにサポート活動に繋げることができている。

運営部署・参加学生数など

取組主体：教育開発・学習支援センター　学習ステーション（事務局：学務部教育支援課）

<2021 年度実績>

新入生サポーター：42 名 ／ 参加新入生：対面 563 名　オンライン 82 名

取組の効果

コロナ禍で大学生活に馴染めるかどうか不安に感じている新入生も多かったが、先輩学生に学生生活や履修・時間割等の相談をすることで、そうした不安が軽減される様子がうかがえた。2021 年度は対面実施を復活させたことで、参加新入生数は 2020 年度の 6 倍以上に増え、対面でのコミュニケーションを求める声に応えることができた。また、新入生サポーターも、開始時はぎこちなさが感じられたが、新入生への対応を重ねていくうちに、自分たちの当時の姿を重ね合わせて親身に向かい合い、最後は先輩として堂々とアドバイスする姿が見受けられた。

今後の予定・課題等

2022 年度も 2021 年度に引き続き、対面・オンラインで実施したが、2021 年度に比べてオンラインの需要がさらに少なくなったため、2023 年度以降は対面実施のみとする予定である。

ピア・サポートの活用

オンラインでのピア・サポート活動

新入生に対する履修相談会 ／ テーマ別の学生交流会

先輩同志がライブで対談、新入生の悩みに応える

三重大学（三重県・国立大学）

取組の目的・内容

本学では、教職員及び学生が一体となった学生支援を推進しており、学生自身による学生支援（ピア・サポート等）にも積極的に取り組んでいる。

① 新入生に対する履修相談会（2020 年度および 2021 年度の 4 月）

新入生支援の一環として、例年対面で行っている履修相談会が実施できないことになったため、2020 年度は Zoom を用いて実施することとなった。

ただし利用者とのやり取りがスムーズにできず、Zoom を用いた個別相談の形式に限界を感じたため、2021 年度は、Youtube ライブを用いて、先輩学生同士の履修や学生生活に関する対談を生配信しつつ、同時にそこでチャット機能を用いて履修に関する質問への回答を行う、という形式に切り替えた。

2021 年度新入生相談会（オンライン配信）の様子

② テーマ別の学生交流会（2020 年度以降の何度か。）

登校できないことで人間関係づくりに支障をきたしていたであろう学生を対象に、Zoom を用いて「新入生」「一人暮らし」「アニメ好き」などのテーマを設定して交流会を実施した。

取組の特徴、工夫している点

① 特に2021年度の取組では、「相談ニーズはあるがオンライン相談には抵抗がある」という決して少なくない層に向けて、新しい形の支援を届けることができたと考える。

② 参加申し込み等の仲介事務を「学生相談センター」（学生総合支援機構下に置く組織）が担当したことで、大学公認である旨を前面に出せたこと、（別途身元確認はできているため）当日の匿名での参加やカメラオフでの参加も可としたことにより、参加へのハードルを下げることができたと考える。

運営部署・参加学生数など

①②ともに、主体となった部署は「三重大学ピアサポーター学生委員会」および「三重大学 ACS（Accessibility and Communication Supporters）学生委員会」といった学生による学生支援団体である。（学生支援に関する組織である学生総合支援機構の教員がそれら団体の指導を行い、学生の取組を支援している。）
①は主に新入生を対象とした。2020 年度は 34 名の相談があり、2021 年度は、3日間の配信で、各日それぞれ 100～300 程度の動画視聴があった。
②は人間関係づくりを希望する比較的若い学年の学生を対象として3回実施した。各回5～10 名程度の参加があった。

取組の効果

① 2021 年度の取組をきっかけに、「スタディライブ」（一緒にレポート課題などに取り組む姿を生配信）や「ポッドキャスト」（ラジオ番組風の音声コンテンツの配信）といったオンラインを用いた企画もいくつか展開することとなり、オンライン（動画配信）での新しいピア・サポートの手段を開拓することに繋がった。

② 大学に登校することもできずに新しい人間関係を作る機会の持てなかった学生らにとって、当時は一定の効果を果たすことができたものと考える。
実際、（対面、参集を前提とした）通常時のイベント系支援の際よりも参加者数は多かった。
先述のように、匿名での参加やカメラオフでの参加など、多様な参加の仕方が許容されていることも重要なポイントだったのだろうと考える。

今後の予定・課題等

① 本学では、今後もオンライン（動画配信）を用いたピア・サポート企画が引き続きいくつか展開されていくことになるだろうと考える。

② 現在は対面授業が本格再開となったこともあり、当企画自体は休止中であるが、「人間関係づくり」を目的とした支援企画を実施する際には、今後もこの企画をベースにやり方を検討していくことができるだろうと考える。

ピア・サポートの活用

ピア・サポート団体「キャンパスコンシェルジュ」

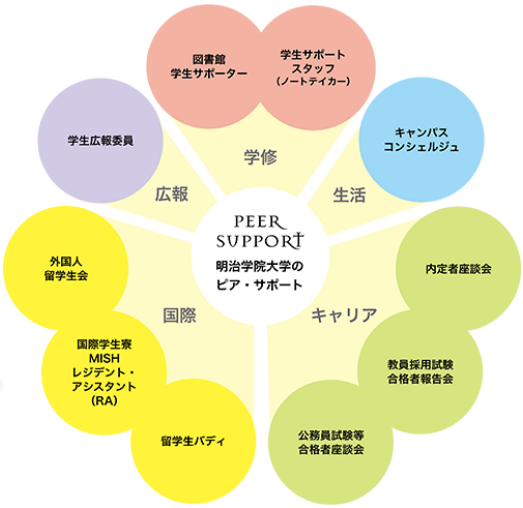
より良いキャンパスライフのために学生と大学の架け橋となる

明治学院大学（東京都・私立大学）

取組の目的・内容

横浜キャンパス開校 30 周年に向けた横浜キャンパス向上計画の一つとして、2014 年 4 月よりピア・サポートチーム「キャンパスコンシェルジュ」の取組を開始した。

現在は、「すべての明学生により良いキャンパスライフを」をモットーとして、授業期間中キャンパスに常駐して質問対応をしつつ、企画の立案・実施を行っている。



明治学院大学のピア・サポート図表

取組の特徴、工夫している点

教育理念「Do for Others」の実現を目指し、学生の成長の機会を提供する「学生と職員の協働プロジェクト」として、学生主体の活動を重視し、職員は企画実現のサポートを行っていることが特徴である。

コロナ禍では、SNS を利用した質問対応・Youtube での動画発信や「MED Talks（個性豊かな学生が自身の経験を語るトークイベント）」「就活の刃（就職活動に関する悩みを先輩学生に相談できるイベント）」等のオンライン実施など、キャンパスにいない学生にもサポートが行き届くよう工夫した。

運営部署・参加学生数など

横浜管理部を中心とした複数部署横断プロジェクトチームにて運営を行っている。

学生は、全 16 学科中 14 学科から、4 年生 6 名・3 年生 6 名・2 年生 8 名の合計 20 名が参加している。

取組の効果

本取組は、学生と職員を繋ぐ架け橋として効果を発揮している。例えば、目安箱設置による学生からの意見の吸い上げや、各部署・学部が広報したい情報をコンシェルジュの SNS で学生へ拡散してもらうなど、双方向の意見を繋いでいる。

また、参加学生の分析力・構想力・コミュニケーション力などの向上にも繋がっている。

今後の予定・課題等

2022 年度以降も本取組を継続予定である。

取組開始時と比較して、学年学科が多様な学生が参加しており人数も増えているため、学生間での目的意識の共有が今後の課題である。

コロナ禍における留学生交流

オンライン留学交流室と定期イベント

現実空間と同じ感覚で交流できる「オンライン留学交流室」

茨城大学 (茨城県・国立大学)

取組の目的・内容

コロナ禍以前、本学ではキャンパス内に設置された「留学交流室」において日本人学生と留学生との自由な交流が活発に行われていた。しかし、2020 年度から、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため留学交流室の一時閉鎖を余儀なくされ、キャンパス内で国際交流活動を行うことも困難になった。

そこで、コロナ禍においても交流の場を設けるため、日本国外・自宅にいてもオンライン上で交流できるスペース(オンライン留学交流室)を常設し、雑談会やゲーム交流等を通して日本人学生と留学生が交流できるイベントも定期的に実施することとした。

取組の特徴、工夫している点

オンライン上で現実空間と同じような感覚でコミュニケーションをとれるツールを活用し、オンラインで陥りがちな一方向のコミュニケーションだけでなく、双方向のコミュニケーションを取れる場を提供できている。

また、イベントの企画・運営の中心的役割を学生に担わせることで、課題解決のための思考力・表現力やコミュニケーション力を養う機会にもなっている。

オンラインイベントの様子

運営部署・参加学生数など

オンライン留学交流室の設置・運用はグローバル教育センター及び学務部国際交流課が行い、イベントの企画・運営は、学生から募集した「交流室チューター」が中心となって行う体制をとっている。

2021 年度の交流室チューターは、人文社会科学部 2 年次 2 名、工学部 3 年次 3 名、理工学研究科博士後期課程 1 年次 1 名が務めた。

イベントの参加者は国際交流に関心のある日本人学生と留学生で、イベントごとにばらつきはあるものの概ね 20～30 名程度の参加者数となっている。

取組の効果

イベントに参加した学生のアンケートによると、多くの参加者から「コロナ禍にあって様々な人と話す機会がなかったが、多くの学生・留学生と交流することができ非常に楽しかった」という趣旨の回答があり、交流の場を提供するという目的が達成できていると言える。

また、「自分のコミュニケーションスキルをもっと向上させたいと感じた」等の回答もあり、学生にとっては学習の動機付けとなる機会にもなっている。

今後の予定・課題等

2022 年度も引き続きオンライン留学交流室を常設し、オンラインイベントも定期的に開催していく予定である。イベント参加者からは対面でのイベントを期待する声も増えているため、状況を見ながら対面のイベントも企画できるよう検討を行っていく。

一方、本学はキャンパスが 3 か所に分散しており、オンラインでのイベントは普段あまり接する機会のない他キャンパスの学生同士が交流することができる機会ともなっているため、今後も継続していくことを検討している。

コロナ禍における留学生交流

インターナショナルランチ

日本人学生と外国人留学生が英語でプレゼン

香川大学 （香川県・国立大学）

取組の目的・内容

2020 年 6 月よりオンラインにて開始した取組である。新型コロナウィルス感染拡大防止の影響で、キャンパスへの出入りが自由にできない時期があり、そのような環境でも学生間の交流が途切れないようにすることを目的とし、当取組を始めた。毎回一人の学生が 15 分程度、英語でプレゼンを行い（テーマは自由に選定）、その後、質疑応答を行う。基本的には、日本人学生と外国人留学生が毎週交代でプレゼンを行うこととしている。

取組の特徴、工夫している点

日本人学生と外国人留学生が毎週交代でプレゼンを行っている。毎回異なる学生が発表することで、発表者や発表内容の偏りをなくすことができる。また、プレゼンの最後に必ずＱ＆Ａセッションを設けており、参加者全員がお互いに質問できるように、発言しやすい雰囲気を作っている。

運営部署・参加学生数など

インターナショナルオフィスの留学生センター、グローバルカフェセンターが連携して取り組んでいる。参加学生は学部生・大学院生と幅広く、参加人数は日本人学生・外国人留学生・教員合わせて平均 15 名程度である。

取組の効果

英語でプレゼンを行い、人前で質問をすることで、スピーキング力に自信がついた日本人学生が多くいる。また、外国人留学生・日本人学生問わず、自分の出身地の紹介や、文化に関わるプレゼンテーマが主であったため、イメージとは異なる国や地域の特色を知り、各国・各地の文化の理解を深めることができた。

今後の予定・課題等

2022 年度も同様の形式で継続予定である。新型コロナウィルス感染拡大の状況をみながら、ハイブリッド形式で開催する。

今後の課題としては、参加している学生が固定メンバーのため、当取組について、多くの学生に知ってもらい新規の参加者を増やしていくことである。

コロナ禍における留学生交流

中国人留学生会オンライン交流会、韓国人留学生会オンライン交流会

入国規制下でも在学生と新入生をつなぐオンライン交流

学習院大学（東京都・私立大学）

取組の目的・内容

○ 開始時期 ： 2021 年 4 月（オンライン）

○ 取組の目的 ：

例年、入学した私費留学生向けのオリエンテーション後に上記の留学生会の代表者数名がそれぞれの国から入学した新入生に大学生活や日本での生活について説明を行っており、在学生と新入生をつなぐ大事な機会であった。新入生が抱いている不安を軽減させると共に、よりよいキャンパスライフを送るきっかけづくりをすることを目的としている。

○ 経緯 ：

2020 年はコロナ禍のため交流会を実施できず、在学生より、新入生の情報が得られないとの相談があった。また新入生からも新入生同士や在学生とのつながりを感じられないとの訴えもあった。

そのため 2021 年度に、渡日できていない留学生なども含めて、新入生と在学生を集めて、オンライン交流会を大学が主催した。

交流会では、自己紹介、大学生活、履修登録、日本での生活について在学生から説明してもらい、新入生が抱くコロナ禍の不安を軽減することができた。

取組の特徴、工夫している点

○ 海外にいる学生も参加しやすいようにオンラインでの開催とした。また参加率を上げるため、周知を複数回行った。

○ できるだけ早い段階で交流が持てるように、入学後 1 週間程度（履修登録締切り前）で開催した。

運営部署・参加学生数など

運営部署 ： 学習院大学国際センター

参加学生 ： 留学生（中国籍留学生 30～40 名、韓国籍留学生 10 名程度）

取組の効果

2020 年入学の留学生より、大学からの問い合わせに対して迅速な対応がなされるようになったことや、情報不足による大学生活への不安から休学を選択する学生が減少したことなどが効果としてあげられる。

今後の予定・課題等

2022 年度は、入学する留学生で入国制限の対象者がおらず、全員入国が可能であったことから、通常の対面形式で行った。

コロナ禍における留学生交流

パデュー大学日本語クラブとのオンライン交流

海外留学中の学生が仲介役、オンライン国際交流

成城大学（東京都・私立大学）

取組の目的・内容

成城大学の学生交流協定校であるパデュー大学（米国）に交換留学中の学生が、留学を通して現地の人の温かさや講義の高いレベルなどを知り、後輩にも留学を経験してもらいたいと思ったことがきっかけでオンライン交流会を発案。パデュー大学日本語クラブのメンバーと成城大生を繋げることで、双方の学生がお互いの大学について知ってもらうための２回のオンライン交流会を企画した。

成城大学とパデュー大学

オンライン交流会のテーマ

１回目の交流会では「日本とアメリカとの文化の違いを知ってみよう！」をテーマに、少人数でお互いの冬の行事や文化について語り合い、２回目は、ワードウルフというゲームで盛り上がり、「日本とアメリカの学校生活の違い」をテーマに英語と日本語を使い交流を行った。

取組の特徴、工夫している点

オンライン交流会の様子

本交流の最大の特徴は、参加者に言語力の差があっても、全員が十分に交流できるように配慮した点である。両言語を使う配分に気をつけ、バイリンガルのパワーポイントを使い、英語または日本語だけを話す時間を設けることで、参加者全員が何をしているか理解し、満足のゆくコミュニケーションを行うことが出来た。

イベントの冒頭では自己紹介とアイスブレイクで双方の国や大学にちなんだ楽しいクイズを行い、お互いに対する関心を持つように導いた。

また、2 回目はちょうど春休み中の実施であったため、4 月から成城大学に入学を予定している高校生に向けて SNS で発信を行った。高校生 2 名と他大学の学生の参加もあり、多様な視点での交流を深めることが出来た。

アイスブレイクの様子

運営部署・参加学生数など

監修部署 ： 成城大学国際センター
企画実施 ： 国際交流サポーター運営局
2 回の交流の参加者 ： 計 42 名(第 1 回 24 名、第 2 回 18 名)
内訳 ： 成城大学 18 名、パデュー大学 21 名、東京国際大学 1 名、高校生 2 名

取組の効果

参加者からは
「コロナ禍で海外交流が難しい中で、濃厚な時間を過ごすことができて良かった」
「アメリカの大学生とのコネクションが作れたので良かったです」
「Getting to meet and talk with people living in Japan was an awesome experience!」
など、のコメントが寄せられ満足度の高い交流会だった。

日本からアメリカに留学をしている学生が仲介役となり、両校の学生がお互いの大学への興味を深め、コロナ禍で諦めていた留学や国際交流ができることを知ってもらえる機会となった。また、大学のホームページにこの交流を企画した理由や目的、そして実施報告を行うことにより、どんな状況であっても、工夫をすることにより、現状を変えることができるという強いメッセージを発信することができた。

今後の予定・課題等

2022 年度の前期から留学生の受け入れが再開され、大学にも対面の国際交流が戻ってきた。留学生のサポート役のバディが役所や銀行口座開設を手伝い、ウェルカムパーティには大勢の成城生が参加。毎月行われる国際交流イベントも毎回盛り上がっている。

対面の国際交流が失われた過去 2 年間には、協定校のパデュー大学(米国)やニューカッスル大学(オーストラリア)、また国際交流サポーター運営局が働きかけて実現したライデン大学(オランダ)やベトナム人大学生との交流など、オンラインで多くの海外の学生とも繋がることができた。コロナ禍がなければ生まれなかった交流もあるので、この繋がりを大切にしてオンライン交流も継続してゆくことを模索している。

コロナ禍における留学生交流

未入国留学生対象オンライン 日本語ディスカッションクラスの実施

日本語を話して留学生・日本人学生がオンライン交流

帝京大学（東京都・私立大学）

取組の目的・内容

○ 取組を開始した時期や経緯

2021 年度、未入国留学生を対象に LMS を中心としたオンライン授業を展開していたが、秋セメスター開始後も水際対策が緩和されず日本に入国できない状態が続く中、当該留学生から「日本にいないので日本語を話す機会が少ない」「日本語力の低下が心配」との声があり、授業以外に日本語を話す機会を提供することが課題となった。

本キャンパスには学部進学をめざす留学生が学ぶ日本語予備教育課程があり、担当教員と相談し、一部授業に未入国学部留学生も参加し、日本語ディスカッションクラスを行った。

○ 目的と内容

週 1 回。秋セメスター内で 14 回実施。

留学生をサポートする国際交流学生団体学生（日本人学生）を会話パートナーとして加え、身近なテーマについてグループ形式でディスカッションを行う。

留学生は積極的に日本語で意見交換ができるようになること、また留学生および日本人学生との交流を目的とする。

取組の特徴、工夫している点

日本語ディスカッションクラスの目的は、学生の身近なところにある問題について話し合うことで、考えを深め、新たな視点を得ることにある。日本語能力の向上だけでなく、思考と日本語の 4 技能の統合を目指した。

ディスカッションのテーマは、「外見と中身」、「愛することと愛されること」といった身近なことから、「高齢ドライバーによる交通事故」、「奈良のシカ」、「安楽死」などの社会問題にまで多岐に渡る。日本語力に差があることから、内容の理解を促すためにアウトラインの母語訳を作成した。これらをもとに、Zoom のブレイクアウトルーム機能を利用し、グループワークを行った。多様な考えに接することができるように、毎回メンバーの構成を工夫した。

運営部署・参加学生数など

主体部署 ： 国際交流センター、日本語予備教育課程

参加人数 ： 留学生 13 名、日本人学生 10 名

取組の効果

未入国留学生からは LMS 授業が中心のなか、「日本語ディスカッションクラスは日本語が話せる唯一の場所として貴重だった」、「オンラインで同じ環境の留学生同士、日本人学生と交流ができて良い刺激になった」、「色々なテーマについて異なる見方に触れることができた」との感想があった。

会話パートナーとして参加した日本人学生からは、「いろんな国にいる人と交流ができる面白さを知った」、「母国語である日本語で表現し伝える難しさを感じた」、「テーマ一つ一つが深くてたくさん考えさせられた」などのふり返りがあり、日本人学生にとっても学びがあった。

今後の予定・課題等

水際対策緩和により留学生の入国が順調に進んでいる状況であるため、留学生をサポートする学生団体と国際交流センターが共同で、留学生と日本人学生が日本語で交流する機会として「日本語ラウンジ」を対面にて実施している。（週 1 回程度）

コロナ禍における留学生交流

しゃべり BAR

外国人留学生の不安を解消。ランチタイムにオンライン交流。

東海大学（神奈川県・私立大学）

取組の実施経緯や目的

コロナが始まり、それに伴いオンライン授業になったことで、すべての学生が大学に来ることができず、学生生活をオンライン授業のみで過ごしていた。特に日本に留学してきた外国人留学生は不安が多く、精神的に落ち込んでいるといった学生が増えていた。そのような中、学生主体で始まって、日本人でも留学生でも、お昼休み～数時間、誰でもオンラインで話しましょう！というのが趣旨であった。

取組の実施期間

2020 年春頃から 2021 年秋頃まで実施。

取組の内容

HP 上やインスタで学生達に周知し、毎回決まった曜日時間に行っていた。

開催時間：週 1 回（毎週水曜）・お昼休み～数時間

基本的には、お昼を食べながら、もしくはコーヒーでも飲みながら気軽に会話を楽しんでもらう事をモットーにオンライン交流の場を提供した。

また、イベント途中にスタッフが企画したゲームを挟んだりもした。

多くの学生が参加した際にはブレイクアウトルームを作るときもあった。

取組の特徴、工夫している点

ZOOM を使い、費用をかけずに気軽に無理なく参加できる内容にしていた。

運営部署・参加学生数など

基本的に当時の国際担当部署内で対応。

参加学生は、本校の日本人学生、留学生。共に友達を作りたい学生が多かった。その他に国際担当スタッフや教員も参加。

取組の効果

この企画をきっかけに、学生同士の交流が生まれ、お互いの SNS や連絡先の交換などを楽しんでいた。

その結果、ある日本人学生と中国からの留学生は共通の趣味がバイクであることが分かり、何度か一緒にツーリングに行った等の報告があった。

今後の予定・課題等

色んな学生に参加してもらいたかったが、知名度がそれほど広がらず、最終的にはメンバーが固定化しまう傾向があったので、周知方法やテーマ決めなどを再検討する必要がある。

コロナ禍における留学生交流

Tokai Hygge

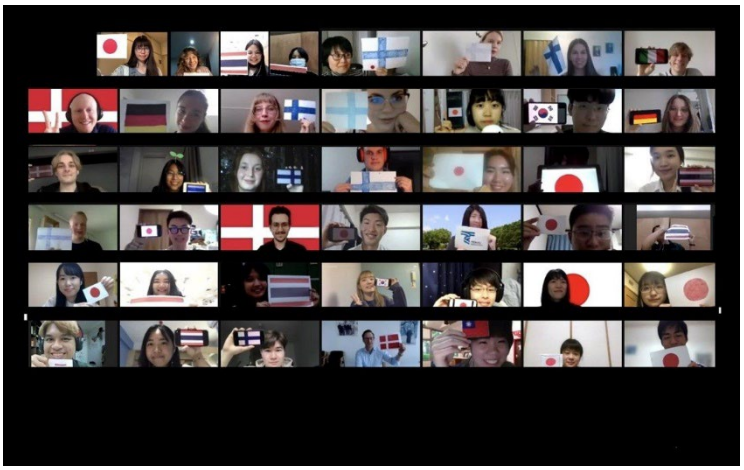
世界中の海外協定校の学生とオンライン交流

東海大学（神奈川県・私立大学）

取組の実施経緯や目的

東海大学では、2020 年春より、東海の学生と海外協定校に通う学生とのオンライン交流活動「Tokai Hygge」を Zoom で実施している。（「Hygge＝ヒュッゲ」とは、デンマーク語で「居心地の良さ」を意味する。）海外への往来が難しい時期でも学生に海外への興味や関心を失わないで欲しいと願い、開始した。海外からの参加学生は、協定校で日本語や日本学を学ぶ学生が大半を占める。

最初は本学がオフィスを持つデンマークとの交流を月に 2 回程度行った。好評だったため範囲を広げ協定を持つ北欧諸国の大学やドイツ、タイ、台湾、韓国など交流を広めていった。



また、Tokai Hygge は国内で孤立してしまっている学生をサポートするという付加価値もついてきた。参加者はこのプログラムを通じて、パンデミック以前には出会うことができなかった国内外の友人を作ることができている。

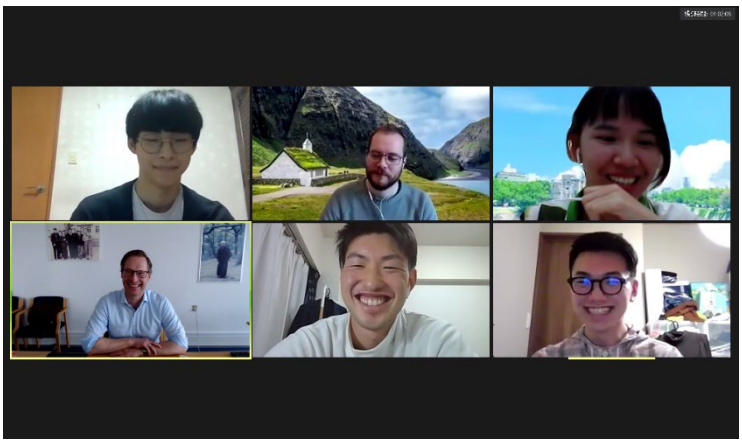
取組の実施期間

2020 年 6 月頃～現在

取組の内容

Zoom Meeting を使用。初めての国と行う場合は、代表者が互いの国の概要やコロナの影響などを紹介してから開始する。

その後ブレークアウトルームで5～6名のグループに分かれる。この時のグルーピングは事前に何語で話したいか希望を取り、なるべくそれに沿うように行う。その後、約40分程度好きな話を各ルームで行う。最後に一堂に会して自分がどのような話をしたのか発表しあう。学生に負担になりすぎないよう、全体で 1 時間程度で終了としている。常連が出てきたころ、司会は学生に依頼するようにした。



取組の特徴、工夫している点

当初は国や地域ごとにセッションを開催していたが、どの国の学生でも参加できる Tokai World Hygge を開催したところ国内外合わせて 100 人以上の学生が参加し好評だった。楽しい時間を過ごしてもらうため、どの言語を使いたいか希望を聞き、それに合わせてグルーピングを行う。また、話のネタが尽きないよう、毎回トピックを一つ決めており、まずはそれについて話してもらい、場が温まったらフリートークに移るようにしている。また、相手の国のことも学んでほしいため、最初にその国の紹介をしてからスタートする。費用はほぼかからない。（Zoom のアカウント費用のみ）

運営部署・参加学生数など

大学の国際化を図る「グローバル推進室」と留学生の派遣・受け入れを担当する「国際教育センター」が協力して行った。
参加学生は 1 年生～4 年生・院生まで、学科は国際学科や観光、医学、音楽、政治経済、法律、などあらゆる学科の学生が集まった。また、これまでは大学が主催する国際交流はメインキャンパスである湘南校舎の学生が中心となっていたが、これはオンラインのため 7 つのどのキャンパスからでも参加ができた。参加者は延べ 1000 人以上に上る。海外から参加する学生は日本語を話したい学生が多いため、本学の学生で英語を不得意とする学生でも日本語で海外の学生と交流ができるというところが大きなメリットだった。もちろん、英語で話したいという学生には英語で対応できる学生同士で同じグループになるようセッティングした。

取組の効果

最近コロナが落ち着き、海外に出られるようになった。この Tokai Hygge で出会った相手の国へ興味が湧き、留学をする学生が増えた。特にデンマークに興味を持つ学生が増え、デンマークへの留学者が増えたことは嬉しい結果であった。（北米とは時差の関係でセッションが持てなかった）

今後の予定・課題等

対面授業が増え、オンライン交流への興味が減少しているように感じる。オンラインはオンラインの良さがあるため、回数を減らして継続的に実施していきたいと思う。また、春学期に行った対面での Tokai Hygge も好評だったため、対面版も継続して行っていきたい。

コロナ禍における留学生交流

オンラインでの留学生交流サポート／日本人学生と留学生の学生交流

多彩な交流企画で日本での学びへのモチベーションを高める

東京国際大学（埼玉県・私立大学）

取組の目的・内容

① オンラインでの留学生交流サポート

2020 年に始まったコロナ禍による入国規制により、日本に入国出来ない学生が多く、そのような学生に対して日本や本学での学びへの意欲・モチベーションや関心を維持させることを目的に日本の生活習慣や、大学周辺の雰囲気を紹介するイベントを実施した。

また、入国できない新入生が孤立しないよう授業以外で交流できる場を設定し、友人ができるよう支援した。具体的には新入生を対象に、日本の生活習慣や日本のマナーに関する紹介するウェビナー、“How to walk in Japan”や”Game event”などを開催し、留学生達のオンラインでの交流を支援した。

② 日本人学生と留学生の学生交流

コロナ禍で学内での対面による交流に制限があるなかでも、日本人学生と留学生との交流の機会を閉ざさないようにする必要から、学生交流の機会を設定した。イベントはテスト期間と休暇を除き、毎月開催することで、日本人学生と留学生が交流できる場を広く提供した。

イベントには、参加する学生に語学要件を設定して、留学生と日本人学生があるテーマのもとに討論する言語交換ワークショップ、語学要件は無く留学生と日本人学生との交流を目的とした、異文化交流会、クイズやゲームを企画して留学生と日本人学生が一緒に楽しむ game イベントなどを開催した。

取組はオンラインと対面両方で行った。対面では人数を制限することでコロナ予防を心掛けながらイベントを開催した。

取組の特徴、工夫している点

① 未入国学生がいることを考慮し、同じイベントを、時間帯を分けて開催した。また、1、2回の開催にとどまらず、同様の機会を 30 回以上設定した。バラエティに富んだイベントを提供することで、できるだけ多くの学生のイベントの参加を促した。

また、交流イベントにとどまらず、講座などで学びのサポートも行い、質疑応答スタイルで個別に丁寧な対応を行った。イベントの告知には教員にも協力してもらい、特にライティング講座“Learn how to write with more impact!“は多くの留学生が参加した。

一方通行のコミュニケーションにならず、双方向のコミュニケーションとなるよう意識した。

② 言語交換ワークショップなどのテーマとしては、留学生と日本人学生両方に興味を持ってもらえるようなテーマを設定した。具体的には「健康的な食品に伴うコスト」、「ファッショントレンド in Japan」、「アニメ＆言語学習」の 3 回の言語交換ワークショップを開催した。

異文化交流会では「ハロウィンと多様性」など、その時節にあったイベントを開催し仮装をして参加してもらい全員が楽しめるようなイベントを心掛けた。ゲームやクイズ、椅子取りゲームなど様々な企画をすることで飽きないような工夫を行った。

運営部署・参加学生数など

国際交流課の管轄のもと、1～3 年生の日本人学生と留学生からなる約 90 名の学生インターンが 6 つのグループに分かれて活動している。
中でも、留学生をサポートする Peer Assistant Team、学内の国際交流を促進する Campus Globalization Team、留学生に日本語を教える Conversation Partner、留学生が日本人学生に英語を教える English Plaza など4つのチームが交流イベントをオンラインで行った。

取組の効果

① 2021 年度は合計 39 回のオンライン交流イベントを行い、延べ人数で約 1,000 名が参加した。イベントをいくつか紹介すると、日本の食べ物や大学近くのレストランを紹介した“TIU Cooking Tips & Cheap Eats”や本学が所在する川越市を紹介した“Explore the History and Cuisine of Kawagoe from the Comfort of your own Home”などが挙げられる。

オンラインのため恐る恐る参加した学生からも、イベント終了後は、大変楽しく、早く日本に来たいというフィードバックが多かった。主催学生からもフレンドリーな雰囲気で楽しめた、早くキャンパスで会いたいという感想が多かった。

② 2021 年度は合計 14 回の留学生と日本人学生の交流イベントを開催し、のべ 273 名が参加した。2020 年春以降は、コロナ禍による日本入国規制の為に入国できず母国から履修している学生も多く、入国できない学生にとっては、これらのイベントがほぼ唯一の日本人学生との交流であり大きな意義があったと考える。

今後の予定・課題等

2022 年 3 月より留学生の入国が再開となり、4 月から始まった春学期ではキャンパスに留学生達の活気が戻りつつあり、夏前には殆どの留学生の入国が終わる見込みである。

本学では 3 月に 3 回目ワクチンの職域接種を行い、また、3 月からの入国制限の緩和に合わせて、多くの留学生が母国で 3 回目のワクチン接種後に入国している。このような状況を踏まえ、秋学期からは、現在オンラインで行っている留学生交流活動やイベントを、より対面中心での活動に戻して行いたいと考えている。また、秋学期にはコロナ禍で 2020 年より中止となっている留学生スポーツ大会や日本人学生と留学生が交流する International Festival の再開を予定している。

コロナ禍における留学生交流

ランゲージバディによる交流サポート

別科生と日本人学生の個別オンライン交流

南山大学（愛知県・私立大学）

取組の目的・内容

入国規制の影響を受け、外国人留学生別科の授業を全面オンライン化したことに伴い、別科生と本学の日本人学生の交流を目的としたランゲージバディ制度を導入。1 名の別科生に対して 1～2 名の日本人学生をバディとし、オンラインでの自由な交流を促した。

取組の特徴、工夫している点

学生同士の「自由な」コミュニケーションを大切にした。

大学側から指定したルールは

①週1回 30 分以上、互いの母語でコミュニケーションをすること

②月1回のランゲージバディミーティングに参加すること

のみとした。

マッチングにあたり、別科生と南山大学生には事前に趣味、母語（勉強している言語）、留学経験等を回答してもらい、その内容にもとづいて学生同士を割り当てる工夫をした。参加した学生は時差を考慮しながら SNS, Zoom 等を上手く使い交流を続けていた。

ランゲージバディによる交流の様子

運営部署・参加学生数など

国際センター事務室が運営部署となり、ランゲージバディに参加する南山大学生の募集～マッチング～フォローアップまでおこなった。

参加者は留学生別科に所属する外国人留学生 のべ 91 名（28 か国）と南山大学生のべ 183 名（1 年生：77 名、2 年生：71 名、3 年生：24 名、4 年生：11 名）だった。

取組の効果

別科生にとっては、渡日ができない中で日本人学生と直接交流することで、授業外で日本語力を高める機会となり、南山大学生との交流を楽しむことがオンライン授業を続けるモチベーションにもつながっていた。

一方、南山大学生はこの取組を機会に国際交流への興味が深まり、その後、学内の交流スペースでTeaching Assistant として活躍したり、国際学生宿舎に入居する等、大学の提供する国際化の取組への関心を高めるきっかけにつながった。また、バディとのコミュニケーションを通じて語学力を維持・向上させる学習効果も見られた。

今後の予定・課題等

2022 年秋以降は留学生の入国が見込めることから、対面による交流プログラムとしてランゲージバディを続けていくことを検討している。

学内にはすでに対面による国際交流スペースやプログラムがあるため、それぞれの目的を明確にし、外国人留学生、日本人学生が様々な形で国際交流機会をもてるようサポートしていく。

コロナ禍における留学生交流

ランゲージ・アシスタント（LA）・チューター／日本を知ろう／クロスカルチャー・カフェ

オンラインで学習支援と文化交流、日本人学生や卒業生にも波及効果

フェリス女学院大学（神奈川県・私立大学）

取組の目的・内容

チューター募集ポスター

① ランゲージ・アシスタント（LA）・チューター（2020 年 4 月～）

留学生の学習環境を勘案し、遠隔授業を支援する目的で開始。週 1 回 60～90 分程度、授業の予習・復習・プレゼンの練習等を、Zoom を利用して日本人学生がフォローした。

② 日本を知ろう（2020 年 11 月～）

従来は対面で実施し、留学生を参加対象としていたが、渡日できない留学生も参加できるよう対面とオンラインの同時開催とし、日本人学生にも積極的に参加を促し、日本の文化を留学生と日本人学生がともに学ぶ場とした（着物、生け花、茶道、和菓子）。

着物文化の学びと浴衣の着付け体験

クロスカルチャー・カフェ

③ クロスカルチャー・カフェ（2021 年 7 月～）

渡日できない留学生のモチベーション維持を目的として開始。身近なテーマ（七夕、世界の祭り、クリスマス、SDGs 等）を取り上げ、オンラインで交流する機会を提供した。

取組の特徴、工夫している点

① 毎月 1 回、活動報告書を提出させ、活動状況を把握し適宜アドバイスを行う。

② 体験学習では、カメラを 2 台使用し異なる角度から撮影した映像を配信した。

③ 海外からも参加しやすいよう時差に配慮して開催時間を調整した。

運営部署・参加学生数など

担当部署:国際課

① 2020 年度(1 年:14 人、2 年:12 人、3 年:9 人、4 年:2 人)
2021 年度(1 年:14 人、2 年:10 人、3 年:7 人、4 年:1 人)

② 2020 年度(対面のみ:本学学生 11 人)
2021 年度(協定校生:26 人、本学学生 47 人)

③ 2021 年度(協定校生:26 人、本学学生:27 人)

取組の効果

① 学期中の中間面談や報告書等からランゲージ・アシスタント(LA)学生もやりがいと成長を感じており、双方にとって効果が認められた。

② 渡日できない海外協定校生の評価が高かった。

～「日本を知ろう」参加者の感想 ～

〇生け花の参加者

自分が良いと思って仕上がった作品でも、離れてみるとまた、印象が変わったり、植物の向きを少し変えるだけで華やかさが変わったりと、先生の手による多彩な変容がとても興味深かったです。

〇和菓子作りの参加者

先生の優しい説明で大変勉強になりました。オンラインで参加することになりましたが大変分かりやすい説明や、カメラの色々な角度などでまるで対面で受けているような気がしました。ありがとうございました。

〇着物文化の参加者

いつも見る柄は花などの植物なので、お面とか手毬などもあって驚きました。私は歴史好きなので昔の着物に触れていただき嬉しかったです。

華道体験

③ 遠隔ツールを活用することにより、過去留学していた留学生(私費・交換)に参加を呼び掛けることで、卒業生(留学生)のネットワークを強化することができた。

今後の予定・課題等

① 活動形態をオンラインから対面に変更して活動を継続する。

② 対面とオンラインのハイブリッドで継続する。

③ 長期休暇中のモチベーションを維持する目的で、夏休み・春休みに実施する予定。

コロナ禍における留学生交流

留学生交流会（オンライン）

留学生ならではの視点で運営、日本語での会話も進む

流通経済大学 （茨城県・私立大学）

取組の目的・内容

コロナ禍で大学になかなか通学できない留学生に対して、日本語力の低下を防ぐとともに、留学生同士が交流できる場を定期的に Zoom で設けた。

Zoom で出来るゲームの実施や、悩み相談や奨学金の書類について書き方の指導を先輩学生が中心になって行った。

取組の特徴、工夫している点

教職員主体ではなく、先輩留学生を中心とした運営チームが主体となって実施した。

複数の国の留学生や日本人の担当教員が参加することにより、母国語を使わず、日本語で会話することが自然と行われるようになった。

交流会実施前後に、運営チームと担当教員がミーティングを実施し、チームメンバーはコロナ禍における留学生ならではの悩みや交流の工夫など、積極的に話題提供をしてくれた。

イベント告知などは、留学生以外の学生や教職員にも行った。

運営部署・参加学生数など

教育学習支援センターが主催した。

両キャンパス（龍ケ崎キャンパスと新松戸キャンパス）の留学生を中心に、少数の日本人学生が参加した。

取組の効果

日本語で会話することにより、留学生の日本語会話力低下を防ぐことが出来た。また、定期的に交流会を実施したことにより、運営チームや留学生同士のつながりが強くなった。

参加した留学生たちは、大学への帰属意識が高まり、その後のイベントや新入生支援の際に、主体的に参加する様子が見られた。留学生以外にも告知を行ったおかげで、日本人学生や教職員の参加もあり、留学生とのつながりや現状理解につながった。

今後の予定・課題等

対面講義の割合が非常に高くなったため、オンラインで集まる必要性が感じられなくなった。

しかし、密を避けるために、対面での実施が出来ない状況でもある。今後の情勢により、対面で実施する方法を検討したいと考えている。また、通学に制限が出た場合には、今回の経験を活かした方法で留学生への支援を実施したいと考えている。

コロナ禍における留学生交流

来日前留学生に対する事前ケア

交流と日本語補講で不安を払拭

津山工業高等専門学校（岡山県・国立高等専門学校）

取組の実施経緯や目的

毎年数名の3年編入新規留学生を受け入れているが、この2年間はコロナ禍で来日、来校が遅れ、年度始めに間に合わないケースが増えた。授業については各教科での対策を取るとしても、その基礎となる日本語の学習と学校生活の適応の遅れを少しでも軽減しようとするものである。

取組の実施期間

2022 年1月～4月

取組の内容

津山高専で受け入れる3年編入留学生は以下の3つに分類される。

①JASSO で1年間の日本語研修を終えて来校

②母国で日本語研修を受けて来日、来校（マレーシア、モンゴル）

③タイ高専で2年間の通常学習を終えて来日、来校

①については日本語力も問題なく新学期から来校できるので3月中にチューターとオンライン、電話で人間関係を作るようにした。

②については来日が遅れたが、その間疎外感を持たないように、定期的にチューターとのオンライン交流を実施。

③は年齢も若く、日本語力も不十分なのでオンラインで定期的に日本語補講を実施し、あわせてチューターあるいは先輩留学生が連絡を取り、学校の様子を伝えるようにした。

取組の特徴、工夫している点

取組の特徴は、日本人チューターの活用、必要経費ゼロ、さらには参加学生の時間的精神的負担をできるだけ少なくした点である。日本語の補講については特命教員が行ったので通常の延長線上の業務とし、日本人チューター、先輩留学生についてはボランティアでお願いした。すべてオンライン上での活動であり、必要経費は発生していない。実施に当たっては、日本人チューター、先輩留学生の負担にならない頻度、方法で行うことが大切と考え、実施方針とした。週1回程度、都合の良い時を選んで、自分たちで時間設定をすれば良く、実施報告については、事後報告でも問題なしとした。

運営部署・参加学生数など

○運営部署：本事業は、この特命教員（1 名）を中心とした実施部会で行った。
（本校は 2021 年度より中四国13高専の日本語教育等拠点校に指定されている）

○参加学生：新規3年次編入留学生、日本人チューター及び先輩留学生

取組の効果

数回の日本語補講でどれだけの日本語力が得られたかは計測できないが、留学生が来日前に日本語教員、チューター等とオンラインとはいえ交流できたことで、精神的な安定を得たことは間違いない。特に来校が4月以降になった留学生にとっては、チューターとのやりとりは疎外感と不安の払拭につながったと思われる。また、日本人チューターにとってもチューターとしての自覚を醸成する手がかりとなった。

今後の予定・課題等

コロナ禍で来日が遅れるような状況が続けば、来年度も同様の活動を続けるのはもちろんだが、コロナ問題が終息し4月の始業時に間に合うように来校できるようになっても、1～3月には日本人チューターとの交流を開始しても良いと考えている。現状は特に問題があるようには思えないので、継続に支障は無い。

コロナ禍における留学生交流

中四国地区高専留学生オンラインイベント

学校間の垣根を越えた大規模なオンライン交流

津山工業高等専門学校（岡山県・国立高等専門学校）

取組の実施経緯や目的

工業高等専門学校（以下、高専）の留学生は1校当たり3学年で10名程度、1クラスでは1、2名と少なく、クラス内で孤立した状態の留学生も少なくない。また彼らは3年生編入時に20～22 歳の者が多く、クラスの日本人学生（17、18歳）との年齢ギャップも大きく、なかなか日本人学生の友人ができない要因ともなっている。津山高専では 2021 年度より中四国地区13高専の日本語教育等拠点校に指定されたことを受けて実情を調査したところ、留学生が孤立感にさいなまれるという実情に直面した。そこでその対策のひとつとして、中四国地区の高専に在籍する留学生間の学校を越えた横のつながりをオンラインで構築し、彼らの孤立感の解消の一助としようとしたものである。

取組の実施期間

2021 年11月～（毎月 2 回程度実施）

取組の内容

具体的な実施方法は、日時とテーマを設定し、Teams にて開催、各校の留学生は自由に参加できることとした。参加はあくまで任意で、毎回のテーマを見てある時は参加、ある時は不参加で構わないとした。毎回のテーマはできるだけバラエティに富むものとし、上級生が日本や母国での経験を語るような会も準備している。実施担当教員は裏方に徹し、会が始まったらできるだけ関与しない。他高専の教員も特に講演などをいただくので無い限り、参加はお断りしている。教員の参加により、留学生に緊張が生まれたり、自由な発言を躊躇したりということ防ぐためである。2021 年度後期からはじめ今年度も継続、月2回程度実施中である。

取組の特徴、工夫している点

参加留学生の負担にならないよう、参加を義務づけない、毎回のテーマを見て「つまみ食い」的に参加すれば良いという点に特徴がある。運営については、留学生の興味・関心に合致したテーマを設定することが最も重要で、当然のことながら参加者数に直結する。会の運営を担当する特命教員は通常の業務の一環として捉えており、ご講演等を依頼する先生方もすべてボランティアでお願いしているので、必要経費はゼロとなっている。

運営部署・参加学生数など

○運営部署：本事業は、この特命教員（1 名）を中心とした実施部会で行った。
（本校は 2021 年度より中四国13高専の日本語教育等拠点校に指定されている）

○参加学生：2021 年度現在中四国13高専には 107 名の留学生が在籍したが、毎回の参加者数を平均すると 20～30 名となる。中四国地区以外の高専からの参加もいただいている。

取組の効果

熱心に参加する留学生もおり、発表を引き受けてくれる留学生も少なくない。こういう機会を求めていた留学生がいたのだという実感はある。異なる高専の留学生が連絡を取り合って参加したり、発表の準備をしたりという例もあるので、横の連絡は構築できつつあると思われる。所属校に馴染んで日本人の友人ができ、日本社会に溶け込んでこのイベントへの参加が必要なくなれば、それはすなわちこのイベントを「卒業」したということであり、このイベントの最終目標でもある。

今後の予定・課題等

今後とも月2回(長期休業中は除く)ペースでの実施を継続したいと思う。Teams を利用して開催しているが、最大の問題は学生に自由な Teams 利用をさせていない学校が存在することである。開催通知等はすべて Teams にて留学生に直接通知しているので、Teams が利用できない留学生は、情報を得られない状況となっている。

発　行　　独立行政法人　日本学生支援機構
学生生活部　学生支援企画課　学生支援調査係
〒135-8630　東京都江東区青海 2-2-1
TEL 03-5520-6169
URL　https://www.jasso.go.jp/